

棲神の法窟

遠藤是妙

一、

棲神の二字に就て、近頃屢々感激を深うする機會を得た。畏くも先帝陛下より立正の謚號を宣下
あらせられ、今上陛下より立正の勅額を下賜し給ひしことは、眞に兩陛下の優渥なる御睿慮による
ことゝ、深く感泣奉謝するところである。而してその何れも身延山に奉藏せられ、祖廟に奉安せらる
ゝに至つた事は、特に深厚なる因縁の存するを觀るのである。それは身延を本源としたる祖廟に納む
べきが當然なれども、更に然るべき甚深之事を思ふ時毎も棲神の文字の閃めくあるを見るのである。
加之會々祖師堂に參り祖廟を拜する度に、宛ら生きて言ふ如き威容に接するの感がする。これ全く棲
神の法窟なるが故である。乃ち棲神の寶窟に就いて聊か佛祖の古を偲び度いと思ふ。

二、

釋尊が久遠劫來常住の化境として、三世無窮に實際の利益を與へた處は現實の娑婆世界である、即

ち有縁深厚の本住處である。故に壽量品には「我常に此の娑婆世界に在て說法教化す」と云ひ、神力品には「國あり娑婆と名く、この中に佛在す釋迦牟尼と名けたてまつる今諸の菩薩の爲に妙法華經を説き給ふ乃至娑婆世界に向ひて斯の如き言を作さく南無釋迦牟尼佛南無釋迦牟尼佛」と云はれてある。設令餘處の諸の國々に於て、衆生を導利する事はあつても、それは盡十方の化用を顯はすべき實力を示されたので必しも釋尊の本意ではないであらう。釋尊は常にこの娑婆世界を以て、生處、得度、轉法輪、入涅槃等の處と定め、吾等衆生の爲に生きた模範を垂れさせられたので、聊か假設的な想像の佛でもなければ、架空的な變幻の世界でもなく、吾等に最も親しい血肉の干係をこの釋尊に於て見聞すると同時に、その出現當時の古を、今末法濁惡の未來からまのあたりに追慕し得る遺跡を、この娑婆世界に見出すことが出来る、宗祖はこの消息を明して、「釋尊は吾等が血肉也、因果の功德骨髓にあらずや」(本尊抄)と述べ、「今本時の娑婆世界は常住の淨土なり」(本尊抄九三九)と宣べられて居る。大日如来や密嚴淨土、阿彌陀如来や安養淨土等……是等は但だ尊特なる佛陀、高遠なる理想境とのみ想像し得るに止まつて、終に吾等と密接不離の干係にあることを見出し得ない。是れ偏に壽量品の教主釋尊を、此土有縁深厚の本佛として尊崇する所以なのである。

娑婆世界と云へば凡聖同居の世界にして、吾等の現在居る處なのだから、是が即ち寂光淨土とは思

はれない、然るに宗祖は常住の淨土と云ひ、荆溪大師は「寂光の外に娑婆あるにあらず」と釋せられてあるのは、三身具足の釋尊を中心とした世界なるが故である、即ち久遠に妙法を証得せられた佛陀が、恰かも妙法の權化として其自身如法の行化は、娑婆の穢土をそのまま、寂光淨土化されたのである。故に觀普賢經には「釋迦牟尼佛を毘盧舍那遍一切處と名け其の佛の住處を常寂光土と名く」と説き、四徳波羅密顯彰の姿まで添へられてある。是れは凡夫も佛になれば、その住處たる穢土も淨土になると云ふ實際の模範であると同時に、確實の證據となる道理である。

元來身土依正は不離の干係なれば、三千建立に付ても兩者欠くべからざる要素にして、依報國土の美化淨化は正報の身の成佛と不斷の佛事に因ることは明かである、而して成佛はまた所證の法の最勝なるに因るのである。隨て佛國土の實現は正法國土の成立を意味する故に、正法の吟味と實行とが大事な出發點で、而かも大果報を齎すべき基本なのである。所謂「法妙なるが故に人尊く、人尊きが故に處尊し」とは眞に名言であると思ふ。今日の俗世間さへも主義主張がよくて人を感化する程の人は、多數の賛成者を得て、相當の大人物となり一度名をなし功を遂げるときには、左様なる人物を産出せる土地の誇となり、その土地も亦實際によくなるのは當然である。況んや出世間の廣大なる佛敎界に於てをや。釋尊の出現によつて、この娑婆が寂光土とも云ふべき最高價值の世界となるのである。

この娑婆世界の中にも、印度の靈鷲山が最も尊い處とされて居る、其の故は靈鷲山は王舍城耆闍崛山の事で、釋尊の本懷たる法華經を説かれた山で、出世の一大事から本地の開顯に至るまで、秘密の奥藏を開示した自所證の境界だけに殊更最勝の靈地なのである。即ち釋尊が七十二才よりの老熟せる晩年を茲に過し、一代を惣括してその結論を與へ、永遠に人類を救済すべく釋尊自らその精神と御舍利とを留めさせられたことは、畢竟釋尊と法華經と靈山とが一つになつて、常恒に世界の中心生命たるべき基礎を確立したものと信ずることが出来る。即ち壽量品に「衆見我滅度廣供養舍利……一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山我時語衆生常在此不滅……常在靈鷲山……我此土安穩……我淨土不毀……每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」とあるのは、慥に釋尊と靈山との身土常住無限の救済を叙したもので、靈山の有難さは茲にあると思ふ、即ち釋尊常在の處であり、如來の全身の在す處である。

三、

吾が宗祖大上人は、釋尊滅後二千一百七十一年に、日本國の東海安房の國に生れ、出家得道東詣南詢、大藏閱覽數回に及び、在來の宗教悉く研討せざるはなく、遂に本化上行の自覺に到達し、未法に於て法華弘通の使命を果し得るもの、我を措いて其れ誰ぞやと深い決心を致して、建長第五の建宗宣

言となつたのである。開目抄（七七〇）に「今度強盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬ」とあるのはこの時の決心を指されたものである。爾來正法の法華經を立て、如說修行死身弘法忍難慈勝の行蹟は、全く天台傳教以上であると、自ら高言して居られる（開目抄七七二）が、事實全くそうで時代から見ても止むを得ないのである。故に時の然らしむるのみと仰せられて決して御自讃でないことが明かである。かゝる法華經の行者の活動せられた日本國は少くとも寂光淨土でなければならぬ。即ち正法を立て、國家を安んずることは、佛國寶土實現の御主張であつて、是が當時の國難打開にもなれば、上下万民の救済にもなつたのである。即ち釋尊の本懷たる法華經の精神を体して、妙法を弘通する爲めに大小の諸難を忍ばれた事が、釋尊の金言をして末法に光輝あらしめ、併せて大聖人に古今無比の絶對價値を附加したのである。この意味に於て吾が大聖人は末法の小釋迦であらねばならぬ。この小釋迦の行化せし處、值難の跡、何れか寂光淨土にあらざらん、龍の口佐渡は勿論、伊東でも小松原でも池上でも岩本でも、凡そ大聖人の經行の靈跡何れも皆寂光の寶所だけれども、（四條書六九〇）殊更に身延山を眞の靈山事の寂光土とせられたのは、身延山に關係深き左の諸御書の御言葉によるのである。

その後身延山に分け入りて山中に居し法華經を晝夜讀誦し奉り候へば、三世諸佛十方の諸佛菩薩も此砌にをはすらん、釋迦佛は靈山に居して九ヶ年の讀誦也、我此山は天竺の靈山にも勝れ日域の比

叡山にも勝れたり、然れば吹く風もゆるぐ木草も流るゝ水の音までも此山には妙法の五字を唱へずと云ふ事なし、日蓮が弟子檀那等は此の山を本として參るべし云云(波木井殿御書二二三)四條書一九八六、松野書一八五八、身延山御書一二九七、南條書二〇七〇

御文章によれば靈山は釋尊が八ヶ年法華經を説き給ふ處、身延山は宗祖九ヶ年法華經の讀誦とある故、天竺の靈山は即ち本朝の身延山なることは明白である。然し「天竺の靈山にも勝れ」と仰せあるは奈何、案ずるに諫曉八幡抄(二〇四〇)には在世と末法と相對して印度と日本との勝劣を判し、現在は本中心祖山中心に往かねばならぬとて、我等を勵まして居るのみならず、南條書(二〇六九)には釋尊自分御自身よりも、末法の法華經の行者を大事に扱ひ玉ひ、大聖人は又「教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり」とて我身を四所の道場に擬せられ、又四條書(一九八六)には「釋迦多寶十方の諸佛菩薩諸天等此の砌に在します功德聚の砌也」とありて、吾が本門の教主の移り住む山、妙法五字の功德の虚空界まで漲る山、實に三大秘法の山なる故に、靈山にも勝れと仰せある筈である。隨て末法に於ては身延山が根源であり中心であらねばならぬ。「此山を本として」の御言葉は即ち其である。彼の日興上人の御書札に「一閻浮提の内至釋迦如來の金剛寶座也」とあるを見ても身延山の最勝なることは疑なき所である。

況んや此の身延山は、大聖人の「墓をば身延山に立てさせ給へ未來際までも心は身延山に棲むべく候」との御遺言によりて用意周到池上より御舍利を捧持して、恭しく納骨せし御廟であり、盡未來際聖靈の棲み給ふ妙境である。其故に一層親しみと尊さとを増すのである。言換れば大聖人が君の爲め國の爲め一切衆生の爲めに一生を捧げた、其の魂魄の宿る處である。日蓮が弟子檀那は勿論、日本國民の齊しく更生の發生地として參詣せねばならぬ處と思ふ。吾が身延山七十四世日鑑上人が、祖師堂の正面に「棲神閣」と大書し、五十八世日環上人が祖廟の額に「常在殿」と揮毫せられてあるのは、兩々相俟て宗祖滅後の靈光を永遠に耀かすものと信するのである。

要之、釋尊の靈山に於けるが如く、身延山は宗祖棲神の法窟であつて、妙法五字と釋尊と御自身とが三寶一体となつて、この山の自然を形成して居るのである。故に此の山自体が無始以來の本佛を彰し、六百六十年來の宗祖當時を物語つて、盡させぬ無量の靈感を與へて居るのである。此處に參りて靈感に打たれぬ程のものは、まだ眞の信境に到達せないもので山川の妙味さへ味へ得ぬ者である。

四、

斯かる尊い宗祖棲神の實所に、參り且つ住む吾等は毎に佛祖の古を回顧すると共に、吾身の現在を反省せねばならぬ、而して佛祖の在りし行動を習學せねばならぬ。吾等が教學の研鑽とは、信念に住

して宗祖の妙解を得る事であり、吾等が修行の増進とは信に住して宗祖の妙行を真似る事である、斯くして祖山秘要之藏を開示し、かくして如説の修行を勵まねばならぬ。

徒に佛祖の過去を讚美した丈では何の役にも立たぬ、それを各自に體現する事が、不言の教化となりて、祖山を發揮すると共に、やがて世界を淨化する事になる。吾等はかくすることの信仰と自由とを有すると同時に、非常に重大なる責任を感じるのである。若し然らざれば眞の靈山處か反つて住む吾等によつて穢土となるであらう。恐るべく慎しむべきことである。